

授業情報誌 Class 第11号発刊に当たって

これからも着実に 歩み続ける 県中教研

今年度も「指定研究の授業情報誌 Class」を、会員の皆様にお届けする時期となりました。これから県内各地で、2年次研究会が開催されることとなります。この情報誌 Class を持って、多くの会員の皆様から研究会に参加していただき、深い学びにいたる授業づくりについて、生徒の姿を基に、参加者の皆さんで大いに語り合えることを期待するばかりです。

今回は特別寄稿として、熊本大学大学院教育学研究科・特任教授 前田 康裕 様より玉稿を賜りました。現在、文部科学省では、次期学習指導要領の改訂に向けて準備が進められています。次期学習指導要領の基本的な考え方は、「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」の三本柱に基づいており、現行の「主体的・対話的で深い学び」の理念をさらに具体化し、教育現場で確実に実現することを目指しています。前田様からいただいた論文には、私たち教員の授業観や教師の学び（研修の在り方）をアップデートし、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための具体策が、図やまんが等をまじえながら分かりやすく述べられ、明日からでもすぐに実践できる内容となっております。公私にわたってご多用の中、示唆に富んだ論文をお寄せいただいた前田様に心より感謝を申し上げます。

新潟県中学校教育研究会（以下、県中教研）は、今年度63年目を迎え、永きにわたって、本県の中学校教育における研究活動の推進と、その振興・発展に取り組んできた組織です。しかも、その活動の中心が、授業改善や授業づくりに焦点が当たり、それをこの広域な本県において、全県規模で展開できているということは、よく考えてみれば、奇跡的なことであり、県中教研の取組は誇るべきものと、捉えております。

しかしながら一方で、少子化に伴う、学校規模の縮小や統廃合、これに連動する教員定数

新潟県中学校教育研究会

会長 長谷川 裕高

(新発田市立第一中学校 校長)



の変化、そして、特に音楽・美術・技術・家庭の教科における教員の減少など、今日的な課題から、これまでの取組の継続が困難となる状況が生じています。

そこで、令和5年度の60周年を一つの節目として、令和6年度に持続可能な今後の指定研究の在り方について検討委員会を組織し、具体的な改善案について、令和6年度末の拡大本部会及び評議員会です承を得た上で、令和7年度から新しい指定研究の取組がスタートしています。県中教研は、今後も持続可能な研究活動等の在り方を探りながら、着実な歩を進めてまいりますことを、皆様にご理解いただきますようお願いいたします。

昨年10月、村上市立山北中学校で開催された、指定研究2年次「理科」の公開授業及び協議会に参加させていただきました。授業内容は、塩化銅水溶液の電気分解(3年)の仕組みを、イオンモデルを使って説明するというものでした。生徒はこれまでの既習事項を活用し、実験結果を矛盾なく説明できる妥当性のあるモデル図を友達と対話しながら考えていました。ある生徒に自分たちが考えたモデル図の解説をお願いしたところ、その生徒は笑顔で実に堂々と説明をしてくれました。また、授業後の協議会でも参加した方々が笑顔で実に楽しそうに活発な論議をされていたことがとても印象に残りました。県中教研の事業運営で重点にしている「教師の『深い学び合い』から『深い学びにいたる授業』の実現」の具体的な姿を見ることができ、県中教研の取組が着実に進められていることに感慨深いものがありました。

最後になりますが、今年度の「指定研究の授業情報誌Class」の発行に向けて、公務ご多用の中、執筆等にご尽力いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。